

して今やバーンチエン遺跡—というよりあの赤い渦巻き模様の土器—は、世界遺産であるという文脈を越えて地域のシンボルとして人々の生活のなかに根付いているのではないだろうか。ウドーンターニーの街中であの赤い渦巻き模様を見るたびに、それは地域の人々とこの土地を繋ぐシンボルのようだと感じた。

引用文献

- 市川米太・長友恒人. 1974. 「熱ルミネッセンス法による土器の年代測定Ⅱ」『奈良教育大学紀要』23(2): 3-13.
- 新田栄治. 2007. 「東南アジア考古学研究の現在」岩崎卓也・高橋龍三郎編『現代社会の考古学』現代の考古学 1 朝倉書店, 70-84.

日本の神社神職を彷彿とさせるマダガスカルのピアンジュ

江 端 希 之 *

マダガスカル共和国の首都・アンタナナリボから北東へ21キロ、標高1,300メートル程度の高原地帯では、松・杉・ユーカリなどの木々が点在するイネ科草本に覆われたなだらかな丘陵が続き、その谷間には水田が広がっている。そこに、伝統宗教の聖地としての側面ももつ世界文化遺産「アンブヒマンガの丘の王領地」がある。アンブヒマンガの丘から谷をひとつ隔てたマンガベの丘の上には、ドゥアニ *doany* と呼ばれる民間信仰の「精霊祭祀の社」が複数存在し、巡礼者が国内外から訪れる聖地となっている。ドゥアニ周辺には、門前町としての機能をもつマンガ

ベ集落が存在する。

ピアンジュと神職の日常の共通点

2015年9月のある日、私は朝からマンガベにあるドゥアニのひとつ、ドゥアニ・ラスアラヴァブルに来ていた。ここの祭祀対象は、人魚とも貴人ともヴァジンバ（神話的先住民）ともいわれる女性ラスアラヴァブルである。ドゥアニには、境内を箒で掃き掃除するドゥアニの守護者（ピアンジュ *mpiandry*）がいた。白いイスラム風の丸帽子をかぶり、着古した洋服にマダガスカル製の腰巻を付けて、中年のメリナ人男性シャルロ氏¹⁾ であ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) メリナ人は、主にマダガスカル中央高原地帯に居住する主要民族のひとつ。16世紀以降メリナ王国を形成し、19世紀にはマダガスカル島のほとんどを支配下に置いたが、1897年にフランス植民地となって王国は滅亡した。メリナ王国には貴族・平民（自由民）・奴隷という身分階層が存在し、各階層はさらに細かい下位区分から成っていた。こうした身分階層意識は、こんにちの社会にも色濃く残されている。



写真1 ドゥアニ・ラスアラヴァブル境内を掃き掃除するピアンジュのシャルロ氏



写真2 ドゥアニ・ラスアラヴァブル社殿内のシャルロ氏

る。シャルロ氏は掃き掃除を終えると、社殿や境内に清めの水をまき、木片を焚いてその煙でも清めた。

朝9時を過ぎると、ドゥアニには次々と参拝者がやってくる。シャルロ氏は参拝者に、ドゥアニの由緒や禁忌を説明する。参拝者がドゥアニ境内で動物供犠を行なう場合、シャルロ氏は動物の血やハチミツ・酒等を捧げるための作法や場所を指示する。そして参拝者から供物を受け取って祭壇に捧げ、参拝者らの代わりに祭祀対象に「祈願の言葉」を捧げる。「祈願の言葉」には、流暢で古風なマダガスカル語を使う。参拝者らの祈願内容は、健康・金運・安産・縁結びなど、さまざまな現世利益である。シャルロ氏は、場合によっては参拝者に聖なる水を振りかけて祝福を祈る。ドゥアニ社殿内で憑依儀礼を行なって祭祀対象からのお告げを受ける参拝者も多いが、憑依儀礼の際、シャルロ氏は見守っているだけである。憑依儀礼によって祭祀対象と直接交渉するのはシャルロ氏ではなく、他の霊媒である。つまり、ピアンジュである

シャルロ氏自身には霊的能力（霊的存在と直接交渉する能力）は必要とされないのである。

こうしたピアンジュの姿に、私は「ああ、同じだ…」との思いを深くしていた。私の実家は静岡県神社だが、私の神職（神主）としての日常の風景と重なったのである。日本の神職もまずは朝、神社や境内を掃き掃除する。聖域を清浄に保ち、祭神の神威を高め、参拝者を迎えるためである。そして、参拝者から供物を受け取って神前に捧げ、参拝者の代わりに「祈願の言葉」（祝詞）を奏上して祭祀を行なう。神職は、参拝者と祭神の仲介者（なかつりもち）を務めることが本義であるが、仲介者といっても祭神と直接交渉する必要はなく、霊的能力は要求されない。

参拝者がいないとき、シャルロ氏は参拝者に頒布するための「聖なる土」を砕いてすりつぶすなど「頒布品」の作成をしたり、境内の掃除をしたりしている。神社の神職も、参拝者がいない空いた時間は、祭祀や境内で使うための紙垂を折ったり、御札・御守や御神塩（清め塩）などの頒布品の準備をしたり、



写真3 動物供儀を行なう参拝者に指示を出す女性ピアンジュ（右奥）

境内の掃除をしたりしている。

シャルロ氏はドゥアニで大規模な儀礼を行なう際は、役場に事前に報告に行く。ドゥアニ社殿の修理や境内の整備に責任をもち、ドゥアニと行政の連絡係を務めるのもピアンジュの役目なのである。つまりピアンジュは祀職（祭祀の専門家）としての宗教的活動のほか、ドゥアニの運営者・管理者としての実務も行なっている。神社の神職も、祀職であると同時に、神社の運営者であり管理者である。祭祀という宗教的行為のみならず、法人としての神社を維持・運営するための実務を行なっている。

ドゥアニと神社は土着的で個別的な存在であり、両者に直接的な関係は無いはずだが、このように私は、底に流れる何かが繋がっているような感覚を覚えた。日本からはるか遠い、ここマダガスカルの地にも、「神職としての私」が自分の仲間のように感じる人々がいた。見た目や規模は違えども、ピアンジュの日々の「業務内容」は日本の神社の神職と「ほとんど同じ」というのが私の実感だったのだ。

「社」の管理権をめぐる権力争い

2016年9月、聖地マンガベの中心的なドゥアニ、ドゥアニ・アンジアチブングを再訪すると、4人いたはずのピアンジュ（女性3人、男性1人）は女性が1人減って3人になっていた。男性の筆頭ピアンジュも含め、ピアンジュらは「彼女は自ら辞めた」と説明した。しかし辞めた本人に話を聞くと「私は追放された」という。さらに周辺の人々に話を聞くと、みえてきたのはドゥアニをめぐるピアンジュ間の争いであった。そこにはメリナ人の間に今も存在する階層意識の問題や、ピアンジュが複数いることによる各自の取り分の問題、背後に存在した親族間の不仲などがあった。

各地のピアンジュらと親交を深める中で、この事例のほかにも「ピアンジュの座をめぐる争い」がそこかしこで生じていることが分かってきた。あるドゥアニのピアンジュを誰が務めるのか（ピアンジュが複数いる大きなドゥアニの場合、誰が筆頭ピアンジュを務めるのか）といった争いである。



写真4 聖地マンガベの中心ドゥアニ・アンジアチブングの祭り



写真5 ドゥアニ・アンジアチブング境内で参拝者を持つ女性ピアンジュら（中央奥）

ピアンジュは、あるドゥアニのピアンジュを先祖代々務めているという世襲型と、宗教的体験の結果新たにピアンジュになる召命型に分けられる。その世襲型（前任者）と召命型（新参者）の間で紛争が生じることがある。

たとえば、新たにピアンジュになろうとしてドゥアニにやってきた召命型の女性 L は、前任ピアンジュに軽んじられ下働きばかりさせられていた。しかし霊的能力があった L は、治療師としても評判を高めていった。彼女の名声の高まりに焦った前任ピアンジュは、ある時彼女に対して公衆の面前で霊的勝負を仕掛けてしまった。相手の得意とする土俵に自ら上がった彼は勝負に負け、肉体的にも重傷を負って所在不明となった。そして L が新たに筆頭ピアンジュになった。

他にも、ピアンジュとしての自分の権勢や利益を拡大するために生じた紛争もあった。行政とのコネをもつピアンジュ D は、世俗

的政治権力を背景に自らの威信と正統性を高めていった。彼が管理するドゥアニ A に程近いドゥアニ B は、彼に敵対的なピアンジュ M が管理していた。ある時 D は政治的権力を活用して、ドゥアニ B のピアンジュの座から M を追放し、自分の息のかかった新たなピアンジュを後任に据えた。

ピアンジュとしての正統性は、ドゥアニごとに異なってくる。ピアンジュの地位を獲得しようとする人は、自らが動員できる資源を最大限に活用し、自らの正統性を高め、競争相手に優越しようとしていた。

こうしたピアンジュ同士の争いに、私はたまたもや既視感を覚えていた。日本の神社においても誰が筆頭神職＝宮司になるかという争いは、そこかしこにみられるのである。ある神社がある人にとって、宗教的・経済的・名声的など何らかの理由で魅力的に映るとき、そこには「神社をめぐる神職間の争い」の芽が生まれる。たとえば地方の政治家（市町村議会議員等）が、地域での名声を高めたなどの理由で新たに神職資格を取得し、地域の中核神社の宮司になろうとする事例があった。しかしそこには前任の宮司がいる訳で、神社をめぐる神職間の争いが生じる。そこで宮司の地位を得るため（あるいは宮司の地位を維持するため）に、各人は各人の「もてる資源」を活用し、自らの正統性を高めて相手に優越しようとする。

あるいは神社本庁²⁾（神社界最大の包括宗

2) 神社神道系の包括宗教法人は複数存在するが、中でも最大の包括団体は神社本庁である。神社には、包括団体傘下の神社と包括団体に属していない単立の神社がある。また、教派神道系の教団に属する神社もある。田舎には、地域住民によって維持されている宗教法人化されていない神社も多い。

教法人)傘下の神社の場合、宮司の任免をめぐって紛争が生じるケースがある。特に、神社本庁から地方の有名神社の宮司に「天下り」する人事の際に争いが生じる場合がある。こうした宮司の地位をめぐる争いでは裁判になることが多い。

つい先日には有名神社の宮司の地位をめぐって、弟(前宮司)が姉(現宮司)を殺害するという事件が起こり、世間の耳目を集めた。この神社は世襲の社家(代々の神社の家柄)が宮司を継いできたが、神社本庁との間で宮司の任免問題が生じたため、神社本庁を離脱して単立神社になったばかりだった。このように日本においては、包括宗教法人傘下

の神社の場合は包括団体との関係や、宗教法人としての法律問題も絡んでくるので多少複雑だが、基本的な争いの構図はドゥアニのピアンジュと同じである。

このようにピアンジュと神職は、仕事内容のみならず、その地位をめぐる権力争いまでもが、似ているのである。それが、ピアンジュと神職の「地位の共通性」からくるものなのか、ドゥアニと神社の「聖地としての在り方の共通性」によるものなのか、その両方なのか、あるいはそれ以外の要因があるのかについては、今後フィールドワークを深める中で、考えていきたいと思う。

In Pursuit of Livelihood: Significance of Cash from Tourists to Local People's Livelihood in Ethiopia

Azeb GIRMAI*

I was in South Omo Zone of Ethiopia for three weeks in the months of August through September of 2017 to conduct my preliminary research for my Ph.D. dissertation. Two women heads of households were selected in two villages.

Ms. Mare (individual names are pseudonym hereinafter) lives in village A, approximately

3 km away from the zonal city of Jinka in South Omo Zone. Mr. Degefe, the chair of a local tourist guide association called “New-Future for Tomorrow’s Humanity,” introduced me to Ms. Mare as one of the households visited by tourists in the village. She agreed to host me to conduct my research to understand how tourism sector contribute

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University